

さいたがわなつものがたり 財田川夏物語

伊藤 健治

螢の宿

阿讃山脈の溪谷や山裾から流れ下ってきた水は、小さな流れを作りながら神田川、河内川となり本流の財田川に合流する。

川は、流域のほぼ真ん中に位置する山本町までを金比羅街道の一つで伊予街道と呼ばれている県道に沿って下り、町の中央の河内橋辺りで流れは大きくカーブしている。そこからは長い土手沿いに讃岐平野を西にはしり、燧灘に注ぐ香川で三番目に長い川である。

篤彦は、学校帰り、財田川にかかる祇園橋のたもとで同級生の守とタケシと別れると、土手を上流に二百メートルほど一気に歩いた。そして竹やぶの木陰に佇み、額の汗を乾しながら川原を眺めた。

財田川は、大雨のたびに川の様子を変えていたが、流れの真ん中に小高く盛り上がった砂洲だけは雑草をしげらせ、季節の花を咲かせながら、もう何年もの間そこにあった。

その砂洲の向こうの知行寺山に入道雲が出ている。麓に、夏草におおわれた千田堤がつづき、それを背に、川の水をためた出水の水車を踏む人の姿が見える。踏み台につけられた日よけ用の大きなすげ傘が案山子のようだ。

昔、その辺りは洪水のたび湾曲した川の流れに堤を突破され、畑が流され放題

だった。それを防ぐために両端を大きな石で築き、内部に瓦石をつめて固められた頑丈で幅の広い堤防が作られた。それが千田堤だ。

五年生になった今年の春、篤彦は学校から行く「千田堤見学」の野外授業で、それが江戸時代の末に築かれたものであることや、堤の名前が千田数馬という武士にちなんでつけられたものだとということを知った。

草の間に白く乾いた小径のある前方の土手は陽炎の中で揺れながら、県道にかかる河内橋のたもとまで続いている。橋の手前、土手の下で陽光に輝いている水面、そこが及川だ。そこより下流に二百メートルほどのゆるい流れは絶好の泳ぎ場で、夏になると日の暮れるまで、子どもたちの姿が絶えることはない。

淵の川面に浮かんだ小舟の上で投網をうつ人影がある。川漁師の竜夫はんだ。竹やぶの反対側の土手下に、漁の足場であるトタン屋根の番小屋がある。そこにあるセンドンの枝に、竜夫はんの白い六尺ふんどしが風になびく時期が来ると、鮎漁が解禁されたのがわかる。そして、財田川に夏がやって来るのだ。

川沿いの土手を来て、竹やぶもとの坂を下り、畦道からお荒神さんのお堂の裏の小径が篤彦の通学路だった。さとうきび畑の隅にあるポンプ小屋のところまで来ると、モーターでくみ上げられた井戸水が、しぶきを上げながら水路にあふれ出ている。

篤彦は、竹やぶでむしり取っていた笹の葉で笹舟を作ると、それを道沿いの水路に浮かべた。流されていく舟と速さを競うためだ。最初、勢いをつけすぎ、草の根につまづいて倒れた。尖った石に膝があたり、半ズボンの足に血が滲んだ。倒れるとなかなか立ち上がれない。その間に、笹舟は草におおわれた水路に滑り込んで

見えなくなつた。

「今日も、また、負けてしまった……」

篤彦は口惜しさに耐えられず唇を噛んだ。

幼い頃、篤彦の中に住みついた病気は、ずっと体力を奪いつづけていた。小学校に入ったころは、運動場を走って横切ることができた。だが今は、両足を交互に素早く前に出すことさえできない。まだ、どこの医師も名前を特定できない病気だった。自分の体が得体の知れないものに侵され続けている。そんな不安に襲われることが、次第に多くなっていた。

篤彦は、及川の泳ぎ場で水に浸かって過ごすことのできる夏がとても待ち遠しかった。水の中では体が自由に動くので、病気を忘れて遊びに夢中になることができるからだ。

去年の夏もそうだった。足首や膝、胸や肩へと冷たい水に体が慣れていくときのあの感覚。思うように動いてくれる手足……。

「ぼくの夏がまたやってきた！」

体の奥に甦ってくる力を感じながら、篤彦の胸はいつの間にか弾んでいた。

「笹舟との競争のことはもう忘れよう」

お荒神さんの石垣の下まで来ると、小径は水路から離れ、お堂とその向かいの中屋敷の長い土塀にはさまれた急な坂に差しかかる。

樹齢三百年という椋の木漏れ日は地面までは届かず、そこは昼でも薄暗い。この小径に入ると、瞼の裏で光の粒子が点滅する。目がなれると、苔むした太い幹や古いお堂の壁に、銀色のクモの巣やなめくじの這った粘液の跡が白く尾を引いて光

っているのが見えてくる。古い土塀に絡みついた蔦が、よどんだ湿気の中で緑色の生気を発散させている。

篤彦は、人気のないこの場所が好きだった。疲れたら、太く張り出した棕の根に腰を下ろして気兼ねなく休めるし、時期によっては、土塀の向こうから、背伸びをすれば届く位のところまで垂れ下がっている無花果や枇杷の実をこ馳走になることもできるからだ。

坂を登ると、お堂のひろばの入口の通路を隔てたところに小料理屋のぎおんがある。表通りと小径の一角だ。篤彦の母の好恵は、三年前からその調理場で働いている。篤彦も、そこへ家で取れた野菜を届けに来ている。

庭を囲っている夾竹桃や芙蓉の生け垣の高い所の花に、今年は手が届く。茎が伸びるより、自分の背が伸びるほうが早かったのだ、そう思うと篤彦は嬉しくなる。その生け垣の端に勝手口がある。表通りはもう目の前だ。

財田川の土手から、最後にトンネルのような小径を抜けて県道に出ると、文具店や魚屋などの商店や歯科医院などが軒をつらねている。柴田薬局にかかった森下仁丹の髭を生やした大礼服の男の派手な看板や、山本散髪屋の前にある赤・青・白の三色のねじり棒。金比羅街道のほぼ中央に位置する山本町の中でも、この界隈は一番にぎやかなところだった。

表通りは左に行けば及川のそばの河内橋に、右は金子座の前を通りバス駅にながっていた。木造の山本町駅は、琴平經由で善通寺にまわる便や、県境の豊浜に向かうバスの始発駅であり、西香川の主要な町である観音寺と琴平への拠点でもあった。

篤彦の家は、ぎおん脇の小径を出て表通りを真っ直ぐ横切り、向かいの路地を

入った奥にある。このまま家に帰りたくなかった。お堂の裏でたつぷり休んだから、まだ歩ける。

ぎおんから路地をはさんだ二軒目の自転車屋がタケシの家だ。タケシはヘビが嫌いだ。お荒神さんの石垣であおだいしように見てから、二度と土手とお堂の裏の道は通らない。祇園橋から駅前角をまわる表通りが、彼の通学路なのだ。お荒神さんのひろばへ誘おうと思つてのぞいてみたが、まだ帰っていない。守との将棋が、また長びいているのだろう。篤彦は向かいの魚屋の店先で、前掛け姿の親父さんが氷をひくの見かけ、それを見ながらタケシを待っていた。

そこへ好恵がやって来た。夕方の開店前に、料理材料の買い足しの用ができたらしい。今日も割烹着のままだ。

ぎおんには、女将さんと好恵を姉さんと呼ぶ二十歳すぎの夕希ちゃんと、母より五つくらい若い和代の二人の仲居がいた。女手ばかりなので、時々、出入りの竜夫さんが魚を届けるついでに、家まわりの仕事をしていた。

好恵は帰り際、地面に落ちた氷のくずに足の裏を乗せて遊んでいる篤彦に声をかけた。

「道草ばっかしせんと早う帰って、おじいちゃんみてあげてよ」篤彦はうなづき、母としていた約束の駄目押しをした。

「明日の晩、蛍狩りと映画、絶対に一緒に連れて行ってよ」「わかった、わかった」好恵は下駄の音を響かせながら、足早にぎおんに戻っていった。

映画の看板を見たらすぐに家に帰ろう。そう思いながら、篤彦は駅の近くの金子座に足を向けた。映画館の前まで来ると打ち水の染みだ土と、新しい看板の泥絵の具が

混じりあい、何ともいえない匂いがただよっている。客用の自転車置き場の水たまりに青い空と看板が映っている。見上げると「金色夜叉」という題で、帽子をかぶった学生が日本髪の女の人を抱きかかえている大きい看板が目飛び込んできた。

(以上8月22日放送分)